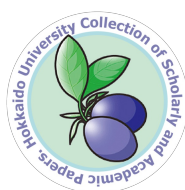




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	高校生における欺瞞行動と本来感の関係 : 「本当の自分」をめぐる「本当らしさ」とは何か?
Author(s)	唐川, 真歩; 佐藤, 奈月
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 147, 65-73
Issue Date	2025-12-24
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.147.65
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98602
Type	departmental bulletin paper
File Information	07_1882-1669_147_5.pdf



高校生における欺瞞行動と本来感の関係

—「本当の自分」をめぐる「本当らしさ」とは何か?—

唐川 真歩*・佐藤 奈月*

【要旨】本研究では、欺瞞行動と本来感の「本当らしさ」の関連に着目をし、高校生を対象に欺瞞行動が本来感の増減にどのような影響を与えるのかを検討した。その結果、欺瞞尺度については、高校生では「利得性欺瞞」、「虚飾性欺瞞」、「適応性欺瞞」、「対人志向性欺瞞」の4因子が抽出された。また、欺瞞行動が本来感に与える影響については、「利得性欺瞞」、「虚飾性欺瞞」、「対人志向性欺瞞」が本来感を増加させるのに対し、「適応性欺瞞」は本来感を低下させる可能性が明らかになった。この結果を踏まえて、本来感の増減には自分の言動自体の真実性ではなく、自分の意志による行動ができているか否かが影響する可能性があると考えた。また、本来感の定義における「本当らしさ」は、真実性よりも自分の意志が行動と一致しているという意味を含む可能性について議論した。

【キーワード】欺瞞, 本来感, 本当の自分, 過剰適応

問題と目的

(1)「本当の自分」と本来感

近年、教育現場やメディアにおいては、「本当の自分でいられるように」「自分らしく生きよう」という言葉が多用され、「本当の自分」でいることが重要視されているように見受けられる。例えば、道徳教育においては、「本当の自分」「自分らしさ」について考える授業実践が複数行われており（日高村立日高中学校, 2023; 台東区立富士小学校, 2025）、東京都教育委員会では小・中・高校生へ向けた「自分らしい生き方の実現を目指して」というキャリア・パスポート（東京都教育委員会, 2020）や、「自分らしさ」を見つける授業展開例（東京都教育委員会, 2017）を公開している。

「本当の自分」は、英語ではAuthenticityと表現され、Taylor（2003）は現代社会における道徳的理想がAuthenticityであるとしたうえで、それは「自分自身に忠実であれ」という理想であると指摘している。また、国内の心理学研究では、自分らしさを表すものとして、「自分自身に感じる自分の中核的な本当らしさの感覚の程度」（伊藤・小玉, 2005）である本来感（sense of Authenticity）という概念が検討されている。

本来感についての研究は、これまで多岐にわたってなされてきたが、中でも本来感がwell-beingを高めること（伊藤・小玉, 2005）やストレス反応を低下させること（田中・下田, 2013）が指摘されており、本来感が精神的健康に影響を与える重要な要因であることを示されている。さらに、学校現場との関連としては、本来感が学校適応感を高めること（折笠・庄司, 2019）、また友人関係における過剰適応を低めることが明らかにされており（今枝, 2021）、学校生活を快適に送るためにも本来感を高めることが必要であると考えられている。

* 北海道大学大学院教育学研究院博士後期課程 教育心理学講座（発達心理学）
DOI: 10.14943/b.edu.147.65

一方で、本来感を促進する要因について明らかにした研究については、主に被受容感に関する研究が多い。家族や友人からの被受容感が本来感に影響を与えていることは複数の研究で指摘されており（鈴木・小川, 2008; 石原, 2013; 卜部, 2022）、他者からの影響により本来感が増減する可能性が明らかにされている。本来感については、中学生において男子の方が女子よりも高いこと（卜部, 2022）、また中学生の中でも1年生、3年生に比べて2年生が高いこと（折笠・庄司, 2018）が明らかにされており、性別や学年によって本来感の高さが異なる可能性がある。

さらに、自身が他者に働きかける行為と本来感の関連としては、過剰適応が本来感を低下させることが明らかにされており（益子, 2016）、他者に過剰に合わせてしまうことで自分への本当らしい感覚が持ちづらくなる可能性が示唆されている。しかしながら、なぜ過剰適応が本来感を低下させるのか、そのメカニズムの詳細は明らかではない。過剰適応とは、「行き過ぎた適応であり、内的な欲求を無理に抑圧してでも、外的な期待や欲求に応える努力を行うこと」（石津・安保, 2008）とされており、過剰適応傾向がある者は自らの感情・行動を自己抑制しつつ、他者志向行動や他者の期待に合わせた行動により外的適応を高める努力を行っている。

このように、自己抑制と他者志向行動という視点から、過剰適応が本来感を低めるメカニズムを検討するなら、自己の感情や行動とは異なる他者志向行動をすることで、過剰適応は本来感を低下させると考えられる。そこで、本研究では、自己の感情や行動とは異なる他者志向行動として、欺瞞行動に着目をし、欺瞞が本来感に与える影響を明らかにすることで、過剰適応が本来感を低下させるメカニズムについて検討する。

(2) 欺瞞と嘘

欺瞞とは、「伝達者が虚偽であるとみなす信念を事前予告なしで他者に形成しようとする、成功する可能性も失敗する可能性もある意図的試み」（Vrij, 2008）と定義される。また欺瞞と類似する概念に嘘があるが、欺瞞は他者を意図的に誤った方向に導く行為であり、嘘は欺瞞の下位に位置付けられ、間違っていることがわかっている情報を伝えて他者を欺く行為であるとされている（Levine, 2014）。

嘘については、「嘘つきは泥棒の始まり」ということわざのように、一般的に悪いことだと考えられている一方、日常生活で「過剰な」対人葛藤を避けることを目的として嘘が用いられ、嘘がコミュニケーションの潤滑剤として機能しているとも指摘されている（Vrij, 2008）ことから、嘘を含めた欺瞞は日常生活において、ときに必要なものであるといえる。

その一方で、欺瞞行動が自分自身にどのような影響を及ぼすのかについては、罪悪感、不安、嫌悪感といった否定的感情をもたらすこともある（太幡, 2020; 山本, 2021）。また、向社会的な目的のためにつかれる嘘であっても精神的健康を悪化させるなど、嘘が自分自身にとってネガティブな結果をもたらすことも明らかにされている（田口, 2022）。つまり、欺瞞行動が否定的感情を生み、また精神的健康を悪化させるのであれば、ストレスや精神的健康と関連の深い本来感も低下させる可能性が考えられる。しかしながら、欺瞞と本来感の関連について検討した研究はこれまでにほとんどない。そこで、欺瞞行動が本来感にどのような影響を与えるのかを探ることにより、欺瞞の効果をより詳細に明らかにできると考えられる。

また、自分自身の欺瞞行動を図る欺瞞尺度（下村他, 2005）については大学生と社会人を

対象としたものであり、この尺度をより以前の年齢段階、具体的には小学生、中学生、高校生に適用して検討した研究はない。さらに、過剰適応との関係を検討することを考えるなら、過剰適応については、「他者からの承認欲求」が中学生・大学生に比べて高校生で高いことが明らかにされており（石井他, 2017; 益田他, 2018）、高校生は他の学校段階と比べて過剰適応が起きやすい時期であるといえる。そこで本研究では高校生を対象として、既存の欺瞞尺度が適用可能であるかを検討することとする。

以上より本研究では、欺瞞尺度が高校生にも適用可能であるかを検討した上で、高校生を対象に欺瞞行動が本来感にどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的とする。

方法

1. 調査対象

2022年12月に、高校生1～3年生を対象として、オンライン上での質問紙調査への協力を依頼し、239名（男子117名、女子122名、年齢15～18歳、平均年齢16.69歳）から回答を得た。なおオンラインによる調査はネットリサーチ社を介して行った。

2. 調査内容

(1) 欺瞞行動尺度：欺瞞行動については、下村他（2005）の欺瞞尺度（25項目）を用いて「まったくあてはまらない（1点）～よくあてはまる（5点）」の5件法で尋ねた（例：「私は、楽しくもないのに、うわべだけ楽しそうに振る舞うことがよくある」「仲間とうまくやっていくために、仲間の望んでいることを積極的にするほうだ」）。ただし、調査対象者が高校生であることを考慮し、意味が大きく変わらないよう項目の表記を改変した（例：「コンパなど人との集まりでは」と表記していたものを「人との集まりでは」とした）。

(2) 本来感：本来感については、伊藤・小玉（2005）の本来感尺度（7項目）をもとに、4件法で尋ねた（「まったくそう思わない（1点）～とてもそう思う（4点）」）。なお伊藤・小玉（2005）と異なり、「どちらでもない」を省略した理由は、中高生を対象とした本来感の先行研究（石原, 2013；赤川他, 2016）に倣い、より本来感に対する顕著な傾向を捉えるためである。

3. 倫理的配慮

本研究は、北海道大学大学院教育学研究院令和4年度研究倫理審査委員会（No.22-37）の許可を得て実施したものである。

結果

1. 欺瞞尺度の高校生への適用可能性の検討

分析に先立ち、「欺瞞尺度」の各項目について下村他（2005）が示していた7因子で確認的因子分析を行ったところ、既存の因子構造にはならず、7因子（「迎合的演技」、「他者志向」、「状況対応」、「自己顕示性」、「欺瞞肯定」、「虚飾性」、「利得性」）でのモデルの適合度指標は、 $\chi^2=618$, $p<.01$, $CFI=.80$, $TLI=.76$ となった。モデルの適合度指標では、 χ^2 が小さく有意でないこと、また CFI と TLI は値が1に近づくほどデータへの当てはまりが良いとされている（小塩,

2021)。これらの点から高校生に関しては、7因子ではモデルの当てまはりが良くないと判断した。

そこで欺瞞尺度25項目について、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、因子負荷量が.35未満の5項目が削除された。固有値1.0以上を因子数の抽出基準とし、初期解における固有値の減衰状況（第1因子6.27, 第2因子1.62, 第3因子1.40, 第4因子1.12, 第5因子.97）と解釈可能性から最終的に4因子が抽出された（Table1）。各因子に含まれる因子負荷量の高い項目から、先行研究の因子名を参考にし、第1因子は「利得性欺瞞」（ $\alpha=.71$ ）、第2因子は「虚飾性欺瞞」（ $\alpha=.76$ ）、第3因子は「適応性欺瞞」（ $\alpha=.72$ ）、第4因子は「対人志向性欺瞞」（ $\alpha=.70$ ）と命名した。下村・関口・工藤（2005）による既存の尺度と比較し、因子負荷量の高い項目から判断すると、先行研究における「欺瞞肯定」「状況対応」が「利得性欺瞞」,「自己顕示性」「虚飾性」が「虚飾性欺瞞」にそれぞれまとめられた。また、「他者志向」が「適応性欺瞞」,「状況対応」が「対人志向性欺瞞」にそれぞれあてはまることが明らかになった。一方で、「迎合的演技」「利得性」の項目は、本研究で明らかにされた4因子にそれぞれ含まれていることが確認された。

また、本来感尺度については先行研究と同様、「本来感」（ $\alpha=.86$ ）の1因子構造が確認された。

Table1：欺瞞尺度因子分析結果

因子	I	II	III	IV
第Ⅰ因子 利得性欺瞞（$\alpha=.71$）				
正直で損をするより、嘘をついて得をした方がよい	.77	-.01	.15	-.19
必要とあれば、相手の目を見ながら、真面目な顔をして、嘘をつくことができる	.61	.07	-.12	.07
それなりに納得できる理由さえあれば、人に嘘をつくのは許される	.53	.03	-.07	.13
人に対してはいつも正直に対応すべきとは限らない	.46	-.16	.17	.16
道徳的にみて正しいと思うときにだけ行動すべきとは言い切れない	.38	-.01	.07	.25
私は、勝ち気で自己中心的な方である	.38	.07	.03	-.05
成功するためには、自分のプラスにならないものはすべて切り捨てていくべきだ	.38	.10	-.15	.09
第Ⅱ因子 虚飾性欺瞞（$\alpha=.76$）				
仲間の中で、私が注目の的になるようなことをよくする	.03	.85	.00	-.03
人との集まりでは、冗談を言ったり話をリードしたりする方だ	.06	.59	-.17	.28
私は、周りの人たちから注目されたいいつも思っている	.18	.57	.16	-.19
人を信用しすぎると、ひどい目に遭うことが多いとは限らない	-.14	.47	.03	.19
私は、流行に敏感な方である	.07	.37	.10	.17
第Ⅲ因子 適応性欺瞞（$\alpha=.72$）				
私は、周りにいる人たちの言動にとっても影響されやすい	-.10	.04	.81	-.07
自分より立場が上の人には意見を合わせておいた方がいい	.08	.00	.54	.06
どう振る舞っていいかわからないときには、私は他人の振る舞い方を参考にして行動することが多い	.15	-.12	.47	.25
私は、実力以上に自分をよく見せようとしがちである	.01	.32	.42	-.01
第Ⅳ因子 対人志向性欺瞞（$\alpha=.70$）				
周りの人や状況に合わせて、自分の言動を変えていくのは得意である	.16	.06	-.02	.58
仲間とうまくやっていくために、仲間の望んでいることを積極的にするほうだ	-.25	.09	.36	.56
嫌いな相手であっても、私は、表面的にはうまく付き合っている	.14	.11	-.11	.45
人にものを頼むときには、本当の事情を話すよりも相手の納得するような理由を言うほうがよい	.33	-.06	.11	.35
因子間相関		.45	.55	.54
			.41	.44
				.53

各変数の記述統計と性差, 学年差

まず高校生における欺瞞行動及び本来感の実態を明らかにし, 各因子間の関連性を検討するために, 各因子の平均値を算出して尺度得点とした。各尺度の下位尺度間の相関係数を算出した結果と, 各変数の基礎統計量をTable2に示す。「適応性欺瞞」を除く欺瞞行動3タイプと本来感の間には, それぞれ有意な正の相関が見られたが, 「適応性欺瞞」と「本来感」のみ有意な相関は見られなかった。

Table2: 変数間のゼロ次相関係数と基礎統計量

	1	2	3	4	n	α	平均値	標準偏差
1. 利得性欺瞞	-				239	.71	3.30	0.73
2. 虚飾性欺瞞	.47**	-			239	.76	2.95	0.88
3. 適応性欺瞞	.51**	.48**	-		239	.72	3.48	0.85
4. 対人志向性欺瞞	.56**	.52**	.55**	-	239	.70	3.41	0.84
5. 本来感	.38**	.46**	.13	.37**	239	.86	2.53	0.71

*** $p<.001$ ** $p<.01$

また, 下位尺度の平均値について性差, 学年差を検討するため, 欺瞞行動と本来感を従属変数として性別と学年を従属変数とした多変量分散分析を行った。その結果, 性別×学年の交互作用は, $F(10,460) = 1.065, p=.39$ となり有意な差は得られなかった。

最後に, 欺瞞行動が本来感に与える影響を検討するため, 欺瞞行動を独立変数, 本来感を従属変数とする重回帰分析を実施した (Figure1)。その結果, 本来感に対して有意な正の関連を示したのは, 「利得性欺瞞」($\beta=.23, p<.001$), 「虚飾性欺瞞」($\beta=.39, p<.001$), 「対人志向性欺瞞」($\beta=.20, p<.001$)の3つであり, 「適応性欺瞞」のみ本来感に対して有意な負の関連($\beta=-.29, p<.001$)を示した。つまり, このことは, 「利得性欺瞞」「虚飾性欺瞞」「対人志向性欺瞞」については, これらが高まるほど本来感が増加する一方で, 「適応性欺瞞」については, それが高まるほど本来感が低下していることを意味している。

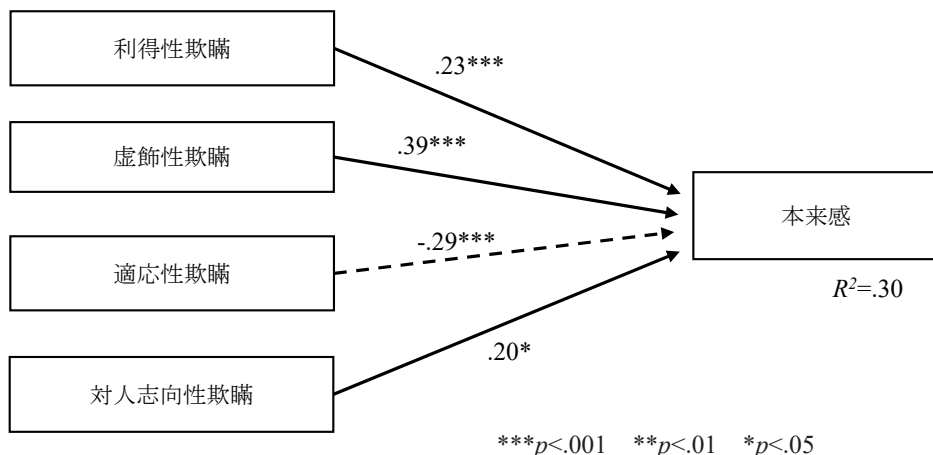


Figure1: 欺瞞行動と本来感に対する重回帰分析

考察

本研究の目的は、過剰適応がどのように本来感を低下させるのか、そのメカニズムを検討するために、欺瞞尺度が高校生にも適用可能であるかを検討した上で、欺瞞行動が本来感にどのような影響を与えるのかを明らかにすることであった。

その結果、欺瞞尺度については、下村他（2005）が大学生を対象に明らかにしていた7つの因子構造とは異なり、高校生では「利得性欺瞞」、「虚飾性欺瞞」、「適応性欺瞞」、「対人志向性欺瞞」の4因子が新たに抽出された。また、欺瞞行動が本来感に与える影響については、「利得性欺瞞」、「虚飾性欺瞞」、「対人志向性欺瞞」が本来感を増加させるのに対し、「適応性欺瞞」は本来感を低下させる可能性が明らかになった。これは他者に嘘をつくこと（欺瞞行動）自体が自身の本来感を低下させるという、本研究における当初の予想とは異なる結果となった。それではなぜ同じ欺瞞行動であっても、本来感に対して異なる影響を与えるのか、以下、その点について考察をしていく。

本来感を高める可能性が示された欺瞞行動は、「利得性欺瞞」、「虚飾性欺瞞」、「対人志向性欺瞞」の3つであった。「利得性欺瞞」とは、自身の利益を目的とした欺瞞であり、「虚飾性欺瞞」とは、自身が周囲から注目を得ることを目的とした欺瞞である。さらに、「対人志向性欺瞞」とは、自身が人間関係を円滑に進めることを目的とした積極的な欺瞞行動である。これらの3つの欺瞞行動が本来感を高めることについては、白田（2020）が明らかにした、情動をコントロールできると自覚していることが自己の本来性を高めることと関連すると考えられる。嘘をつく行為は、自分に対して罪悪感、不安、嫌悪感といった否定的感情をもたらすことが指摘されているが（太幡, 2020; 山本, 2021）、3つの欺瞞行動は、「適応性欺瞞」と異なり、能動的な側面が強い行動である。能動的な欺瞞はその後の自身の感情をある程度予測することが可能であり、欺瞞に対する否定的感情を持ったとしてもその後の情動をコントロールすることが比較的容易であると考えられ、自身の情動をコントロールしているという感覚をもちやすい可能性がある。そして、この情動コントロールの自覚が、本来感の高まりと関連していると考えられる。

一方で、「適応性欺瞞」は本来感を低下させる可能性が示された。この結果は、過剰適応が本来感を低下させるという益子（2016）の主張と一致していると考えられる。また、本来感とは「自分の意向を抑制しているとき」に低下するといわれている（伊藤, 2007）。したがって、この「適応性欺瞞」は自分の意向ではなく、受動的に周囲の期待や状況に合わせてつく消極的な欺瞞などが想定されることから、「適応性欺瞞」の高まりが、本来感を低下させると考えられる。その一方で、本来感を増加させた「利得性欺瞞」、「虚飾性欺瞞」、「対人志向性欺瞞」は、自分のために積極的に欺瞞行動をとることから逆に本来感が高まった可能性も考えられる。また、「適応性欺瞞」は、受動的な欺瞞であるため、能動的な欺瞞と比較して、自身の感情を予測することが難しく、欺瞞のその後の情動をコントロールするという感覚が持ちづらい可能性がある。よって情動のコントロールが自覚しにくいことから「適応性欺瞞」が本来感を低めるとも考えられる。

以上のことをふまえると、本来感とは欺瞞そのものによって影響されるのではなく、自身の欺瞞行動に対する否定的感情をコントロールできている場合、もしくは欺瞞行動の目的が自分のためである場合に本来感を高める可能性があると考えられる。一方で、周囲の期待や状況

況に合わせて他者のためにつく過剰適応的な欺瞞は本来感を低めることが示唆された。このことから、本来感には、自分の言動が真実であるかどうか、それ自体ではなく、自分の意志が伴った行動であるかどうかが大きく影響している可能性が考えられる。したがって、本来感の定義は、「自分自身に感じる自分の中核的な本当らしさの感覚の程度」(伊藤・小玉, 2005)であるが、この「本当らしさ」というのは、自分の言動自体の真実性ではなく、自分の意志が行動と一致しているという意味での「本当らしさ」なのではないかと考えられる。

以上をふまえ、本研究の意義をまとめると、本研究は、従来の欺瞞研究に対して、欺瞞行動の目的によって自身にポジティブな結果をもたらす場合とネガティブな結果をもたらす場合があることを示した点で新たな知見をもたらすものであるといえる。また本来感の研究に対しては、欺瞞行動と本来感との関連を明らかにしたこと、加えて、本来感の増減には自分の言動自体の真実性ではなく、自分の意志による行動ができていくか否かが影響する可能性があるという点を明らかにした。それによって、本来感の定義にある「本当らしさ」の意味するところをより明確にした点で理論的な意義があるといえる。そして最後に、過剰適応が本来感を低下させるメカニズムとしては、過剰適応の自己抑制と他者志向行動においては、他者から行動“させられている”という受動的認識が、自分の本当らしさの感覚の低下に繋がっているということが考えられる。したがって、過剰適応における本来感の低下を防ぐためには、他者に適応しようとする行動自体を問題とするのではなく、その適応行動を自ら意図的に行っているという、適応行動と自身の意志が一致する感覚を持つことが重要であるといえる。

限界と今後の課題

本研究の限界と今後の課題としては以下の点が挙げられる。

まず一つ目は、本研究の結果より、欺瞞行動と本来感の関連には、嘘に対する否定的感情や情動コントロールが影響する可能性が得られた。しかし、本研究の調査では嘘に対する否定的感情や情動コントロールに関する項目を入れておらず、これらの関連を実証的に明らかにできていないため、今後新たに調査するなど検討していく必要がある。

二つ目は、本研究では高校生のみを対象とした点である。本研究の結果より、対象者の学年によって差は見られなかったものの、中学生や大学生など学校段階で比較することで、本来感および欺瞞行動の発達のな特徴が見られた可能性がある。今後はこれらの点を踏まえ検討していくことが必要である。

引用文献

- 赤川 果奈・下田 芳幸・石津 憲一郎 (2016). 中学生の友人関係、自尊感情および学校適応感の相互影響性 富山大学人間発達科学部紀要, 10(2), 1-10.
- Charles Taylor. (1991). The Ethics of Authenticity, Cambridge, Mass: Harvard University Press.
- 今枝 美幸 (2021). 本来感と性格特性、過剰適応の関連 金城学院大学論集 人文科学編, 18(1), 150-154.
- 石原 由美 (2013). 思春期・青年期における周囲の他者からの被受容感と自己の「本来感」の関連 九州大学心理学研究, 14, 117-124.
- 石井 麻美子・荻田 純久・善明 宣夫 (2017). 中学生・高校生を対象とした過剰適応に関する研究:

- 承認欲求とストレス反応の関係から 教職教育研究センター紀要, 22, 101-110.
- 石津 憲一郎・安保 英勇 (2008). 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレスに与える影響 教育心理学研究, 56, 23-31.
- 伊藤 正哉・小玉 正博 (2005). 自分らしくある感覚 (本来感) と自尊感情がwell-beingに及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53(1), 74-85.
- 伊藤 正哉 (2007). 自分らしくある感覚 (本来感) についての心理学的研究 筑波大学, 博士論文.
- 日高村立日高中学校 (2023). 中学校第2学年「自己を見つめる」「自分」ってなんだろう 高知県教育委員会事務局 中部教育事務所
https://www.pref.kochi.lg.jp/doc/2022083100048/file_contents/file_2023419317851_1.pdf
- Levine, T. R. (2014). Truth-default Theory (TDT) : A Theory of Human Deception and Deception Detection. Journal of Language and Social Psychology, 33, 378-392.
- 益子 洋人 (2016). 過剰適応の関係維持／対立回避的行動から見たサブタイプおよび統合的葛藤解決スキルと本来感との関連 北海道教育学紀要 教育科学編, 67(1), 53-60.
- 益田 亜矢子・杉森 伸吉・蘭 千壽 (2018). 青年期の外的適応に関する因子分析 青年心理学会大会発表論集, 26, 48-51.
- 折笠 国康・庄司 一子 (2018). 中学生の本来感の学年差と性差 郡山女子大学紀要, 54, 13-25.
- 折笠 国康・庄司 一子 (2019). 中学生の本来感と優越感および学校適応感との関連の検討：本来感と随伴性自尊感情の組み合わせの視点から 発達心理学研究, 30(3), 132-141.
- 小塩 真司 (2021). SPSSとAmosによる心理・調査データ解析—因子分析・共分散構造分析まで 東京図書株式会社.
- 下村 陽一・関口 洋美・工藤 力 (2005). 欺瞞尺度開発に向けての発展的研究 (1)：作成された欺瞞尺度によって分類されるパーソナリティ・タイプ 大阪教育大学紀要IV 教育科学, 54(1), 159-166.
- 白田 優果 (2020). 大学生における本来感に対する影響因と心理的well-beingとの関連 皇學館論叢, 53(1), 1-14.
- 鈴木 真吾・小川 俊樹 (2008). 中学生における自尊心と被受容感からみたストレス反応・本来感の検討 筑波大学心理学研究, 36, 97-104.
- 台東区立富士小学校 (2025). 学校日記 6年生 特別な教科道徳「自分らしく」
<https://www.taito.ed.jp/1310225/weblog/92156588?tm=20250409165929>
- 太幡 直也 (2020). 嘘をつくことに対する認識尺度の作成 心理学研究, 91(1), 34-43.
- 田口 恵也 (2022). 向社会的な嘘の使用と抑うつとの関連—友人関係の良好さを媒介要因とした適応的・非適応的機能の弁別 パーソナリティ研究, 31(2), 102-111.
- 田中 沙依・下田 芳幸 (2013). 中学生における友人に対する感情に関する研究：自己開示および本来感との相互影響性の検討 富山大学人間発達科学紀要, 8(1), 35-45.
- 東京都教育委員会 (2020). 東京都教育委員会いじめ総合対策【第2次】(下巻) 実践プログラム編 その12
https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/documents/d/kyoiku/taisaku2_2_12
- 東京都教育委員会 (2020). 自分らしい生き方の実現を目指して キャリアパスポートを活用したキャリア教育の充実に向けて
<https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/documents/d/kyoiku/careerleaflet>
- ト部 明 (2022). 児童後期から中学生における本来感の発達の变化, 性差および被受容感との関連 国立音楽大学研究紀要, 57, 1-6.
- Vrij, A.(2008). Detecting lies and deceit: Pitfalls and opportunities (2nd ed.). Chichester, UK: John Wiley & Sons. (ヴェレイ, A (著), 太幡直也・佐藤拓・菊池史倫 (監訳) (2016). 嘘と欺瞞の心理学—対人関係から犯罪捜査まで 虚偽検出に関する真実— 福村出版).
- 山本 恭子 (2021). 欺瞞的コミュニケーションにおける動機と上下関係の影響 神戸学院大学心理学研究, 3(2), 65-72

The Relationship Between Deceptive Behavior and Sense of Authenticity in High School Students: Defining “Authenticity” Surrounding One's “True self”

Maho KARAKAWA*, Natsuki SATO*

Key Words

deceptive behavior, sense of authenticity, true self, over-adaptation

Abstract

In this study, we focused on the relationship between the sense of authenticity and deceptive behavior, and examined how deceptive behavior affects the increase or decrease of originality in high school students. The results showed that four factors were extracted from the deception scale for high school students: “gain-oriented deception,” “self-enhancing deception,” “adaptive deception,” and “interpersonally oriented deception.”

Regarding the impact of deceptive behavior on authenticity, it was found that “gain-oriented deception,” “self-enhancing deception,” and “interpersonally oriented deception” may increase authenticity, whereas “adaptive deception” may decrease it. Based on these findings, it was suggested that fluctuations in authenticity may be influenced not by the objective truthfulness of one's words and actions, but rather by whether those actions are carried out based on one's own volition.

Furthermore, the study discusses the possibility that the concept of “authenticity,” as defined in this context, may imply a sense of alignment between one's actions and one's own intentions, rather than mere factual truthfulness.

* Graduate School of Education, Hokkaido University

